

安藤 一校  
藤郎 補

# 女四書

女論語

上

東

|         |   |   |    |
|---------|---|---|----|
| 大日本圖書會館 |   |   |    |
| 函       | 架 | 一 | 二〇 |
| 號       | 七 | 九 | 冊  |

4  
2601

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

# 始



4  
2601



# 女編語



如院三條孝子書  
母年九月





宋若昭の唐の貝州といへる所の人なりて家

宋若昭の唐の貝州といへる所の人なりて家  
 世々儒と以て聞えたり父の名の茶とて學文を  
 好む五人の女あり皆才學容色共み並勝せり  
 一が若昭の其二女ふして姉妹のうらとて才  
 學ありて文章も巧みあり年長者人の妻とせり  
 と欲せり文學とて世と送らんとの願ひり  
 時の帝は詔と得禁中へ召出され文章を試み經  
 史と講せし頻り帝意を稱ひ五女とてのみ恩  
 寵を賜ふんと仰せられり若昭のみ只管に  
 獨處と願ひ御承申さざりて帝又其意を嘉

らせられ女學士の稱と賜り皇子公主方の師  
 とり宮師と呼まれたりとぞ若昭常み曹大家  
 と慕ひ自ら曹大家擬らへ居られ女論語十八  
 章と著し傳へ今ふと々を屋はる

女論語卷上目錄

- 立身章第一 付 鄭てい 替がひ 之事
- 學作章第二 付 晉しん 文ぶん 明めい 皇こう 后こう 之し 事じ
- 學禮章第三 付 孟めい 姬ぎ 之し 事じ
- 早起章第四
- 事父母章第五 付 房ぼう 愛あい 親しん 妻さい 之し 事じ
- 事舅姑章第六 付 俞ゆ 新しん 妻さい 之し 事じ
- 趙孝婦之事 付 漢かん 張ちやう 氏し 妻さい 之し 事じ
- 顧德謙妻之事

女論語卷上目錄終

女論語卷下目錄

○事夫章第七 付 邵缺妻之事 孟光之事

○訓男女章第八 付 魏緝母之事

○營家章第九 付 文伯母之事

○待客章第十 付 絡秀之事 孔明妻之事

○和柔章第十一 付 莊公后之事 李氏事

○守節章第十二 秋胡子妻之事

女論語卷下目錄終

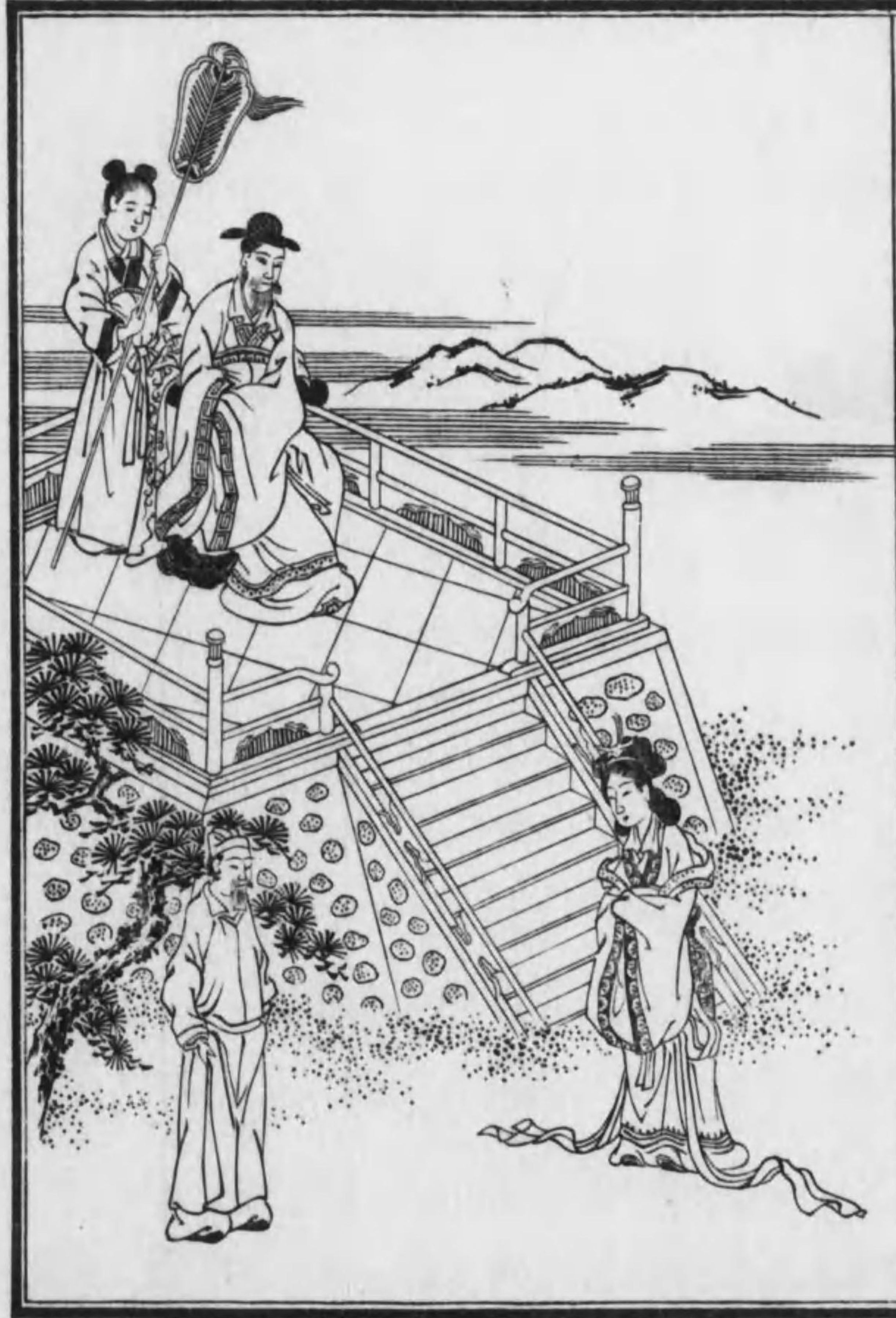
女論語卷之上

立身章第一

立身といふは、女乃作法ゆめくたわくと雖先づ  
我身乃行義はをふと正しく修むる事と云也我  
身の行ひ道ふながひそにほりよましぬむるこ  
ころ何らば、たもひいうわごの智慧才覺藝能あり  
ととも何乃用ふもたらべららば、はる我身と正  
しく修むるといふは、いりやうゆるとむきまら我  
心成潔くして身乃行ひ邪ならぬやうふはる事  
也歩行時の我ゆくべきことおのあうことやの目

ふおあそ、何れとあやと見うへま、つうらだ、物い  
 ふ時、いりにも徐まごふいひ、唇くちびるとひらき、何ら  
 まぐらだ、座ざし居る時、膝ひざと動きだ、立時、  
 裾すそとひきぐぐきだ、よろらば、き事有とて、お  
 ちきふ笑ふぐらだ、怒腹立事有とて、烈敷たけな聲こゑ我  
 何ぐぞあらだ、男乃居る座ざふうち、雑まじつうらだ、常  
 小奥ちゆうおく深所ふかところ小何り、小猥まじ小外そと小出でつづから、門外  
 小事何り、とて、猥まじり小墻壁かきと覗のぞく、へうらだ、他人  
 小勿論もちろん親類しんるいたりとも、男小密ひそう小物云へうらだ、  
 女たりとも、行いよあらぬ人、小親おやむ屋やあらだ。

鄭てい替かへへ楚その成王せいおうの宮女きやうにょなり、或時あるとき成王せいおう亭ていへ上あ  
 り給ひ、宮女きやうにょたち、姓せいは、おひ乃前のまへと通とほふら、  
 小と見給ふ、宮女きやうにょたち、いづき、小王おうの御ご、  
 小また方かたと睨にらふ、おあそ、かこふき見給ふ、鄭てい替かへ  
 一人ひとり顧盼こつぱん給ふ、王おう何なに申まをす、思おもへ、  
 小おれ、せき、さう、數多かずおほ此人このひと々乃中のちゆう小おれん、  
 人斯このひと何なに家いへと、おきと、おをき、か、か、か、  
 心こゝろもや侍らん、今いまより、のち、か、か、か、  
 何らん、小おれ、か、か、か、か、か、か、か、  
 此この貨かと與あへ、其上そのかみ、小汝なんぢが親兄弟しんけいと呼出よびだし、高たか官くわん



小ねし給りんと仰りき共鄭督御らぎと申さ  
 せ、心の中傳もほひふかへり見ると形ありけ  
 きる、王逆鱗ましく急ぎ亭より降させ給て  
 鄭督を召仰り給へ、一回わが方と顧み給事い  
 けふより易き事なり、それより夫人の位とけ  
 り千金の貨を得、一門の人々滅せ出きんを、  
 誰も冀ん事ぬ給ふ、以か給る心あり命ふし、  
 かのけりけ給と曰給ひりき、鄭督か、まは  
 りて申上り、そのま女の禮義の端正和顔と  
 して、たゞしきとてあひと本とん、然るも今貴と

むらあり利欲不耽りて行義を亂しからず見  
 侍らば禮義を以て女乃作法ありんたと  
 ひ貨不越た命試みて、昭りとて禮義を守  
 り侍らん事を所らまほしき事やれと申  
 事々きり、王其ことわり乃たづしきと御感  
 ありて遂に夫人は位ふは存しわづき給ひ  
 侍りて家とせん

學作章第二

學作といふは、女の藝能を習ひて事なり。績紡  
 養蚕織物裁縫などは所作おろそかからず貴

きり賤しきも夫の外に營をせし女の内營  
 と作法とむす道なり。女の夫の養ふもの也と  
 おりひて、おほきもわくも徒らふ月日を送り侍ら  
 ぬ其家必に衰へ侍らば、夫の衣裳垢づき綻び  
 ても補ひ綴らばぬひりせとも褻まらき何そ  
 ばきい見し人ごとふをばしめ笑ひ侍らば、藝  
 能なき女の嫁し、そのち天資の無器用ありやと  
 其の身にばし先らき教育のありきゆゑふ  
 也とて親の名を汚るゝとまのりぬまは、最もた  
 かり習ふべき事ふあり



晋の文明皇后の御年八才ありて毛詩論語と讀  
 ん給ひ御德行をくまらせ給ひ夕家が御子小  
 帝生まれはせ給ひ尊き御位小そけり給へ  
 ともみはくろねりたぬ事なくかゝ家御  
 身ふても天下の女を教へ導らせたまらんた  
 めも自ら学と績と糸と紡きたまひ萬の御  
 器とのふ至るまでかざり何ゆねとと嫌ひ  
 た身ひ御衣裳も綾錦の麗しきと著たきひ  
 ぎ洗濯あつととも召し給ひ朝夕の御食物も  
 も濃き味とかき福とゆをたけまひ世も豊小



治まり御子孫長久おたえしゆりゆりかきかき  
御代りりやふとわかや

學禮章第三

學禮とわかひ女乃禮義と學ぶ事也例令の女乃  
客の家とき座敷ととりとま道具ととりお布  
しゆわが衣裳とあらためあがらそからぬ  
やうふし客とまのづゝ起居とあぶくとし  
歩む事とやうみ手とおけ先聲と低くし受  
返答態懃ふ口とやわらぬやう小物ひひ身と  
かこふ事と顧むりりみも懇み客ととくわを

し世乃常の人我より位高く富榮ゆ人小逢  
ひしゆらふまどまことバやもいひく媚諂足  
手せそらふし馳走しま我より位卑く貧し  
き人ふあひてハ口とよふせう顔見へたと家  
色顯るかやうは心はぬ心はる人あきと見は  
あはらり耻敷とあるべし朝夕みたりあき貴き  
も賤しきもはあつとぞやましくいづきも嬉しくお  
りふやうみ饗應はふあらふとあうりと又  
ゆらぬ辞と多くみひととどぐとををあは僻が  
事也辞多りきまら必だあやまりあふりのあき

只辞少みと心と辞の變らば泉やうみたりやも  
 べー又用の事たりて餘所へ行くらば急ぎ其事  
 と辨とて早く歸るべーどいふきは主ゆんおぬ  
 やるありにしく辞退かこくとめらき振舞たり  
 とも食物とゆふくと賞翫さるゝ見たる一況と  
 酒やどの聊う唇とらふあはれなるりあやぬ  
 べー給仕の人ととひあふと賜をきやどいふもらう  
 けし又道と行へ時ふ面とありけりゆきけり人  
 と見るべうらぶど一人ふ辞をかあらうけり又  
 へ人ふ以かりのらう事ふ遭つべ我身のけが

らわしと人笑ふけりぬら親夫の名中を  
 汚し口惜うるづきわざぬきば常々禮義せたる  
 しくあて人のをらふあやうみ心懸ぶき事ふこそ  
 孟姫へ齊の孝公の北は方けり或時君御狩ふ  
 出給ふふ北は方も御車ふめりて隨ひ行き給  
 ひり家ふ御車りやゆらしを破き北の方も地  
 ふ落給ひり家ふ君聞召て急き車は破きと侍  
 木どもと集りて繕ひせ先らきふ乗りて急き  
 歸り給つと仰りきば北方其繕ひたる御車ふ  
 衣類共せひらげ張おほせせと乗給ひ君へ御



使とたてし仰せ遣さき々家ハ夫き后夫人と  
 とびるし人の間とり外へ出さるるハ安車輜輶  
 とりの車のまき間なりおあり塞ぎたる小乗  
 り堂より下りし時ハ侍女乃女と召具し歩行時  
 ハ帯小繫ぎたる玉と鳴らせ常小内より下りし時  
 ハ帯紐と堅く結び道中より守番をさるとは  
 多ハ禮法なり今繕ひたる車原より乗るべき  
 車より下り道中よりやせらひり原小番の守嚴  
 一からん是皆禮法小たがひたきハ斯無禮ハ  
 子装とせし世よりがらん何らんとりハ禮義

女  
 四  
 書  
 八  
 井  
 古  
 言  
 屋  
 本

と守り死せんこそまけりけきとて自害し給ふづきとし仰せ遣さきりれば君驚かせ給ひ急き安車の御車と取寄せ給ひ御迎ふ越し給ひし未ぞ來着さる内ふちや自害せんとい給ひし我人々救ひ奉りて御迎車ふ載せ給ふと歸らせ給ひり家とゆへ君と匡し我と守り法切や多野謂人ゆへと禮無ハ胡そ適ふ死せゆとといへる心と同一趣なりべし

早起章第四

早起と云ハ朝起しを早く其つとめ我なりまべし

とりの事也女の毎朝暗き内より起衣裳と被更なら顔を洗ひ嗽ぎ梳り急ぎ父母或ハ舅姑の方へ見舞みゆきゆへ臺所へ出食物の用意とゆきべし、女の中饋と掌るといひて貴きも賤きも食物料理の事我我役とて居るは那まに貴人のたとひ自らゆきゆへともおがまらぬおとみおもひ心があはれゆきま人の自らゆきゆへと潔よくととの器ゆへのふ至るはゆぐ汚穢しからざるやうふしを舅姑夫ふそまへ事つるべしやうは事朝起せゆへとゆへがとみ家べし惣と

て此事のこみ限らば朝起の人間萬事の生とめ  
とぬる基ぬきば日高くぬる中を朝寐しとやうく  
起出てもうくくとして其所作せりはとめば時  
まふふまて顔洗もぬ髪も梳らば食物の時分と  
間み後き侍らばいぬ家とおさむるあつと  
い成侍るにまぬ最も女乃心懸ぶき事ふこそ

事父母章第五

是の父母ふ事うて孝行とやん事と述べたる章也  
夫き娘たるものい毎朝早起いそむ父母の卧給  
ふ所へ行おりばり侍らば何あつても御用此事

いけふらぬうと問奉うて冬ぬきの冷給えぬ  
かと問ひ暖りぬ家やうふやう夏ぬらば熱くは  
みらまぬうと問ひ涼きやうあし起出給ふ我  
待らまぬう飢給え食を進ぬ渴き給え湯と  
まぬらば御側近く立寄る萬の事あはゆらばと  
ひまぬらせき御心み適ふやうふぬさんと思ひ  
まぬ家づいばく夕ぬ寐給ふ時も右の如くふ心  
はのひまぬ常ふ父母は言ふ事とたろそかふ  
聞づららばい聞得ぬ事あらば幾度も問返  
て御心み適ふやうふまぬ父母年老ひ給え

行末のしほしからし家事と恐き時の間も孝養  
 乃志とまたりつららば父母病と煩ふ事あらば  
 晝夜とわりぞ御傍らと離き度帯と解きしそ何  
 つかひ奉り御藥食餌湯水ふ至るまであどとく  
 調の熱うらたゆほからぬ中うみしそ進りま  
 びらせたくゆらゆらとあきあき悔哀むと  
 いひても益ぬき事ぬき存へましゆらち日  
 と惜とたうかまらふべき事ぬらと不幸ふし  
 と父母よ後き侍らる深き恩徳のあどと水とひ  
 田らしと家ふあらば三年の喪とつとめ祭り弔

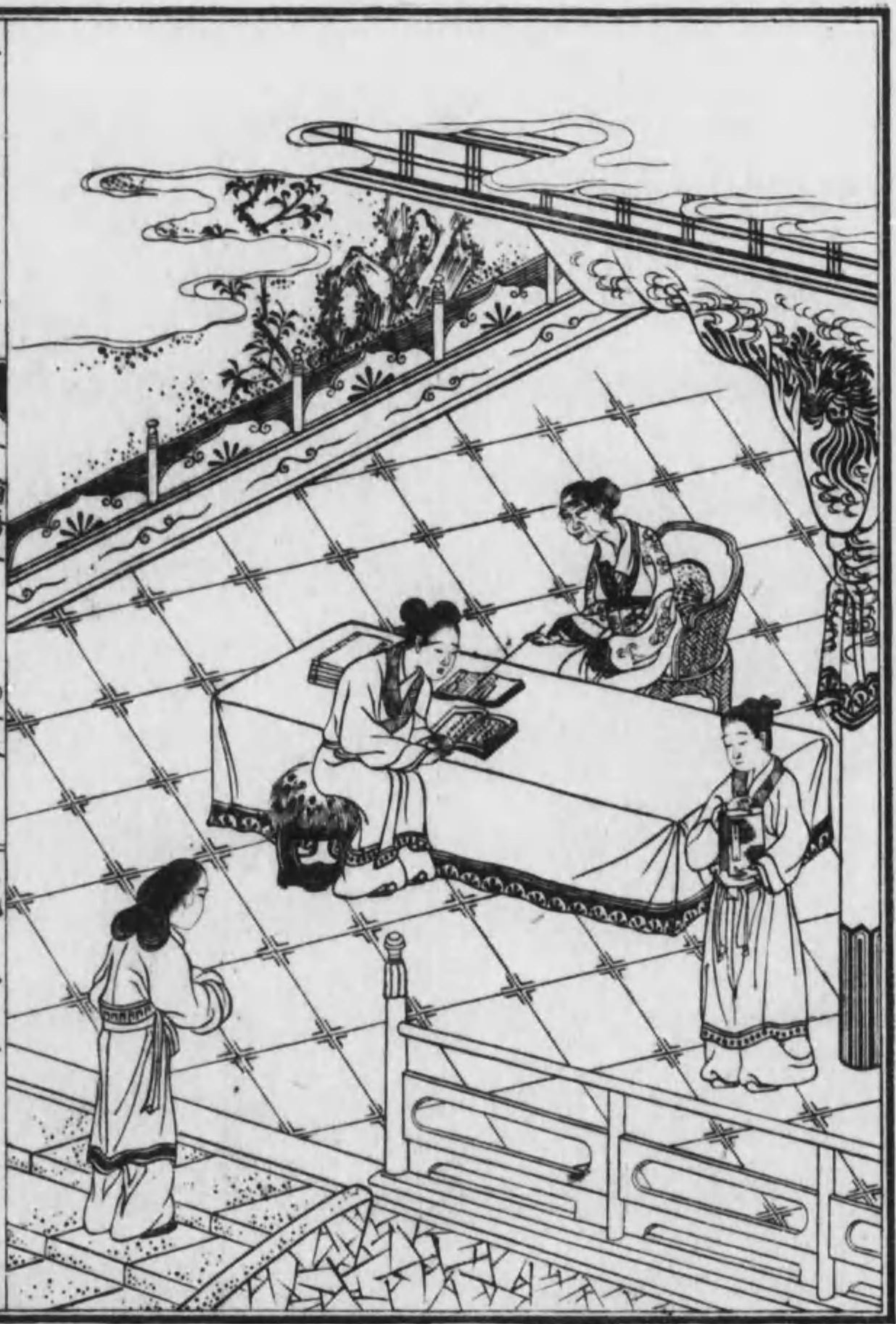
らふとち生るよはらふゆのふ異なりゆふや  
 うふ慎み行ひ他人へ嫁入しとのちと雖とも心  
 ふ喪と服し常ふ教育を賜らりし事と思ひ吾身  
 と正し亡父母の名と汚きもやうふ心懸づき事ふと  
 清河の房愛親が妻崔氏に學文廣く才智勝ま  
 だふ人あは二人の子ふ自ら九經と教へ朝夕  
 誠り勵ましめ給へば二人の子各譽れ汝得る  
 兄の景伯は清河の太守とぬる清河の志とま  
 としと家ふ民の訴へ判ち難き事ゆまは必と  
 母ふとひたきまらりてぞゆとまきり或時具

丘とつゝ所乃百姓其母不孝なりとて母訴  
 へり家より下吏の官負詮議し申れ家不孝  
 此罪の三千第一なりきバ此百姓死罪逃るべし  
 らんたとて己不斬首みまひまりり家時其義國  
 の守景伯不具申上りきバ景伯やみとぬく情  
 之れ心出來る今少く相待ち給へといひは夫  
 我が母の前みゆき此の訴のゆまを語りて如  
 何斗らひ侍らんと問きんれば母崔氏申られ  
 々家へ惣とく物の道理を考へ見らる名を聞  
 た家をかりの直み其人ふりひく面を見たり

乃た一うぬるみあかた家が如くぬきバ孝行  
 の道も魯ある人の書記したるを讀み又人の  
 の教を聞た家斗りみてる善道といひ思ひぬが  
 らも眞實み思ひいきは此不孝の子もこのこと  
 り魯りぬる天資ある斯のことこの尤と犯し侍  
 らバ何んぬく殺さん事もふびんぬり今一た  
 ひ孝行の道と面前目み見せ習ひしと其上ふ  
 も尚不孝ぬらら其時死罪不行をんも遅うら  
 どもゆらバ其不孝の子と母とを呼寄せ我と一  
 所みときゆら汝が朝夕あきふ事ゆは孝行の



景状と日々夜々み見習をせ侍らば自ら感化  
 を糸心出来く孝子と成べしと申はきけれバ  
 尤も然べしと云ふ二人物から呼寄せはる景伯  
 が親み事へ朝夕孝行と盡はるしは徳を一々  
 み見せらせむきば十日あど有りて不孝の子  
 過と悔ひ耻た家々しきふく申々家々此れと  
 君の孝行の体と見奉りて我々が不孝乃過ち  
 後悔いふ事限り有り急ぎ我家へうへはせ  
 給へめ君の御恵と此教み々心と改め孝と  
 有りはかたなくおとひ侍る有りて申はきば





崔氏おあせり。此不孝の子顔ハ耻たる色  
 形きども其心ハ以何ぞ耻ぢ。今暫く見習ハせ  
 んとてとめねき給つべ。廿日何まりふ形りぬ  
 ゝ頃不孝乃子自ら我咎と責く。五体と地と投  
 ず。頭と叩きて血と出。泣口説く過や。何や  
 まちと悔ひ悲し。い何る孝行のこ  
 け。小徹せり。けらハかんけんとく。母子とと  
 みからけき。あふそれとりのち。不孝の子及  
 て大孝行の人とけり。名と世と著し。侍へりけり。と  
 あん

事舅姑章第六

こきる舅姑ふつかへ孝行と成る事とのべたは  
 章あり、まてふ嫁入し後ハ、あうとあうとめ我  
 我父母の如くおひ孝行と成るまべし、毎朝手  
 水とまいらせ湯茶とたて牛すり飯ハ申いらか  
 ちととせ、め肴ハよく煮熟したるをたてまら  
 るべし、晝夜とわつとせ慎む事へ、よるハ何し  
 りふ臥させまいらせ、何しとあわ疾くおきと見  
 まひふゆき、よはら乃孝行が父母ふまこし  
 ながふづららば、とこ此あは後、おととあうと

あうとめふは、ゆは事と心とすし、思ひ他人  
 に向ひて何しとせ、ゆふいひにわし、喚び給へどもま  
 ぬぬがわあやゆり、飢凍へ給ふと、顧見と  
 娘ハ天地の何しとせ、ふとく所なき大悪人、おき  
 天罰うねらば、逃るづらば、おをき、  
 孝行とつとまぶき事也。

内則乃とせし、あ、よめはあうとあうとめ  
 片かゆふとち、鶏乃鳴時、介ふとゆくと、手  
 ちらひ、口とせ、ま、か、ゆ、あ、身はあうとあうと  
 うとあうとら、此臥とせし、ゆらとあうとあうと

氣せしぐめ聲をよらこむしめく御めし物乃  
 めらきうらまきりと問ひ御身不痛く痒きと  
 あらねどもゆしまはぬりとまを問ひていつら  
 きも御あしはふかぬかやうふはりのゆり  
 起居みもつきそひく手せひきたまけまいら  
 せ毎朝御手水せたくゆりり食物せとくのへ  
 居へたくゆりり箸せとりねめ給ふせとく退  
 きとふ寐給ふ時もくらから御給とあはせお  
 しらくく寐させまいらせ何しこみも自ら去  
 きせとりせくもはねりは給ふあうとあうと

ゆ乃御側みくるとよろづは行儀せつし敬  
 きひなをまつりて寒く共うは給せせ痒  
 く共搔を祖ぬらだ裾せかき衣袋は裏  
 せ何らまはづらだからえづきしねくびし  
 をねひりあはぶきし何くびしーのびしーか  
 たちし物ふとりかたりしきぬふとのせ見つ  
 びきを死あどのたぐひもねあれ無禮不恭ふ  
 くつぬしむづきあやねりまぐとめたおと  
 のあしこくはたたくまへせだもこくしーのう  
 ついめはときためだもねあうとあうとめ乃

物と心得くまひとて一人ふゆのを貸さば與  
 つぬ物なり又わが親類乃わがとてなり物なせも  
 らひたりとてとせもは物とせばそのま  
 ありとあうとめふたぐまの物ありか  
 幸たぬの縁がわがかこみ藏め残きてとて  
 き折ふしとゆちて用みたらば若又それせ  
 わが親類み所へたたく思ひもあきをひそ  
 みわがきくみしをたてつてあうとあうとめ  
 みららびひたぐまのりて仰せ次第よまら  
 此外よりづ乃事あきまやぞららるるゆひ

たぐゆの取べき事なり  
 俞新が妻聞氏なりとて寡となり姑みは  
 うつて孝行なりゆあぐあうとめ年老久  
 らららひ起居も自由なりとてきけ姫聞氏  
 手うらら大小便の汗穢を掃除しゆらつら  
 ひひりゆる刺へあうとめ両眼盲きゆら  
 きてふゆをきけ聞氏やきかぬとてせめ  
 る目たふも物乃何やと見わけ給えと老  
 憂き身はつとてうあはれまきかともゆ  
 まはやふとたてひのあふりて少なりと



も何きらかみ形あまわしく思ひ毎日潔ぎと  
 き江のまらふてわがうちで嗽ぎとあうとめ  
 此脂あぶらやうふあう閉塞しんさくりたる目と甜あまりまいら  
 せ、且暮あぐらやあころらぶりなきば、其汚物けがれものは浄きよくな  
 り、ためあや絶たぎる心こころく暗くらかり々家眼けがんだ  
 ちゆちひらきりとは如く明うみなり侍りふ  
 り家あぞ人々孝の徳みく久ひさく盲くられた家眼  
 開ひらきたりともあめ何なんとねん。  
 趙孝婦ちようこうふの年若わかふくく寡あがらみなり姑ぢやうみ事ことく孝  
 行ことと盡つせり元もとより家貧いへまなきば、人ひとみ雇かえられく

機<sup>はたき</sup>を織<sup>お</sup>り朝夕と送<sup>おく</sup>り々家々ゆき此家もせも  
 一珍<sup>めづ</sup>しき食物<sup>しょくぶつ</sup>のきば自ら食<sup>く</sup>ぶ〜持<sup>も</sup>て歸<sup>かへ</sup>る  
 姑<sup>おばあ</sup>不遺<sup>おぼ</sup>り侍<sup>しやう</sup>るゆり或時<sup>あるとき</sup>不圖<sup>ふと</sup>心<sup>こころ</sup>みおのひるる  
 へ我<sup>われ</sup>家<sup>いへ</sup>貧<sup>ひ</sup>し〜きば〜姑<sup>おばあ</sup>亡<sup>な</sup>り給<sup>たま</sup>ふ〜と  
 俄<sup>たち</sup>に屍<sup>み</sup>とおきめな〜ゆり家<sup>いへ</sup>へき棺<sup>はこ</sup>の用意<sup>ようい</sup>形<sup>かたち</sup>  
 り〜かろ〜死<sup>し</sup>と送<sup>おく</sup>る人<sup>ひと</sup>乃<sup>すなは</sup>大事<sup>だいじ</sup>形<sup>かたち</sup>ま  
 い〜いせん〜と案<sup>あん</sup>居<sup>ぐ</sup>る家<sup>いへ</sup>が才<sup>さい</sup>角<sup>かく</sup>ま〜きやう  
 形<sup>かたち</sup>りり〜きば二番<sup>にばん</sup>目<sup>め</sup>は子<sup>こ</sup>と賣<sup>う</sup>其<sup>その</sup>價<sup>あひ</sup>ふ〜脂<sup>あぶら</sup>杉<sup>すぎ</sup>  
 は生<sup>あま</sup>木<sup>き</sup>と買<sup>か</sup>ひ〜の〜棺<sup>はこ</sup>ふゆ〜とま〜られ  
 一〜思<sup>おも</sup>ひあり〜折<sup>お</sup>り〜南<sup>なん</sup>隣<sup>りん</sup>の家<sup>いへ</sup>より



火事出来ぬ殊に南風烈しく吹きて我家危ふ  
 く見へられぬ急ぎ姑と負て避まらせ扱  
 彼棺とのらんときる棺重く中々わが  
 カみ及むぢりりきばせんわく泣口説  
 々多る我き姑は爲ふ子と賣て調へときたは  
 棺只今忽ちむねしくねらんみと悲しきと  
 をくひたさる人か泣きやとやまき叫びあれ  
 ば折しくも聲は下とり風變り北めせとねり  
 けきば孝婦乃家の遂に焼ぢり家はとらん孝  
 行深き志天に通トたすとも云べられ

顧徳謙が妻張氏の姑小事極め孝行  
 り々家々或る夜乃夢みゆは見え家前  
 生乃應報みて明のやんとき雷小攫る  
 何りくとのつ草と被むり侍りりきば驚き夢  
 覺め泣き悲しむさかきりね姑之と聞給  
 ひきみかふく斯く歎き給ふと問給へど  
 とかくく之と語らば明る日みねり其  
 時刻近づくとおりの折節果しく天俄みかき  
 曇り電光夥りりきば夢ははげまきねり  
 と覺語一何り々家々不圖心みおりのひとり侍



予よ我あうとめはあやうふ有りて、雷ふ攫ま  
 き暇に、年老ひたぬひたは御身は驚き給えん  
 事わがかしとたゆひ、急ぎ姑の側と立のき家  
 此後乃桑は木乃ととと、ゆき、いゆやくと死ぬ  
 不代待ち居り予よ、少時ありて漸次空霽れ  
 雷鳴あがゆりて、事故あつひみ家小歸り侍  
 ると、然るふ又其の夜は夢み見侍り々々、汝  
 の夙業み々必定死をばき物み々有りつきと  
 と、常々姑小孝行の多上已み死に臨む姑の驚  
 かんことと憲るこ、かびくその志深きば、天帝憐



之赦<sup>ゆる</sup>くたむつ家<sup>いへ</sup>なり。今<sup>いま</sup>よりのち<sup>あとの</sup>以<sup>もつ</sup>て孝行  
の志<sup>こころざし</sup>くたむたふべし。のらむと告<sup>つ</sup>たむか<sup>か</sup>と見<sup>み</sup>る  
夢<sup>ゆめ</sup>いあどむく覺<sup>さ</sup>め<sup>め</sup>事<sup>こと</sup>き<sup>き</sup>ば有<sup>あ</sup>難<sup>がた</sup>くおとひ<sup>ひ</sup>尚<sup>なほ</sup>々<sup>々</sup>  
孝行の志深くなり。事<sup>こと</sup>はと終<sup>はつ</sup>ん。

女論語卷之上 終

終

